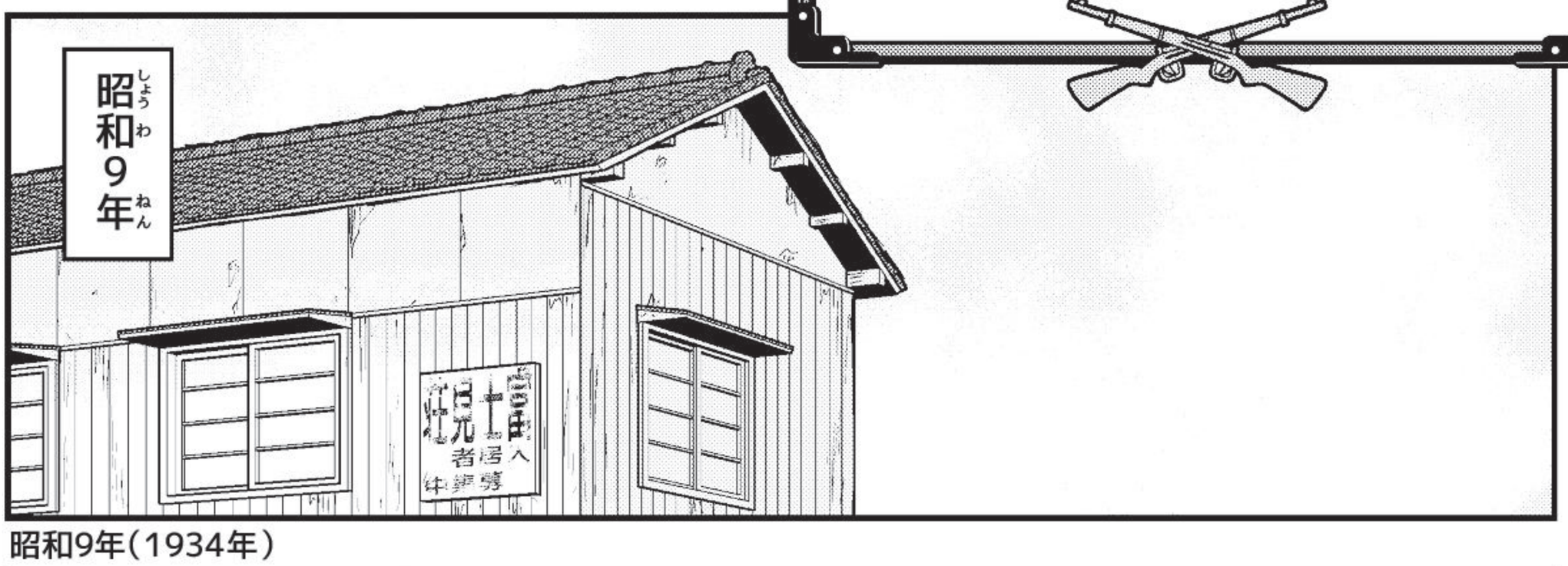
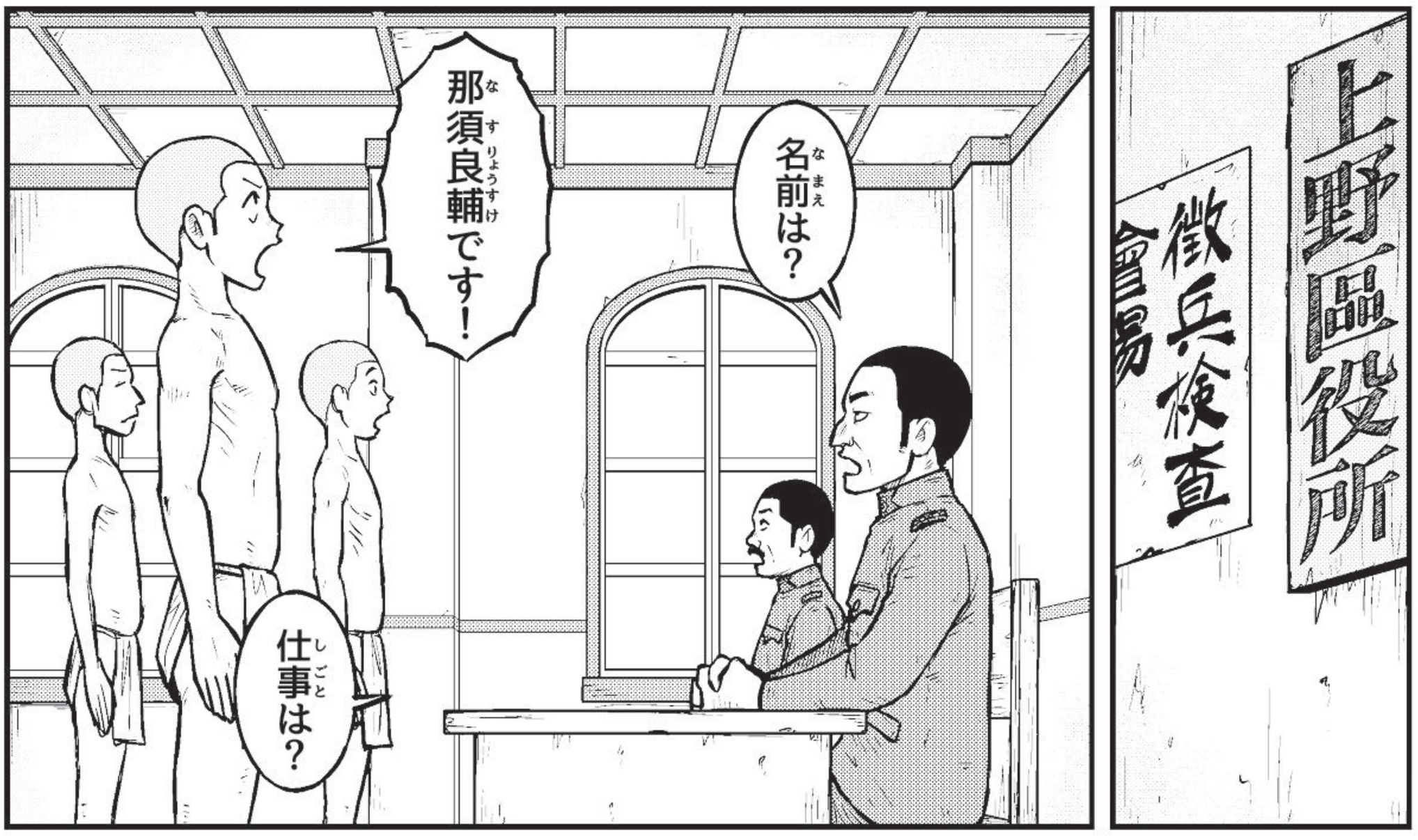
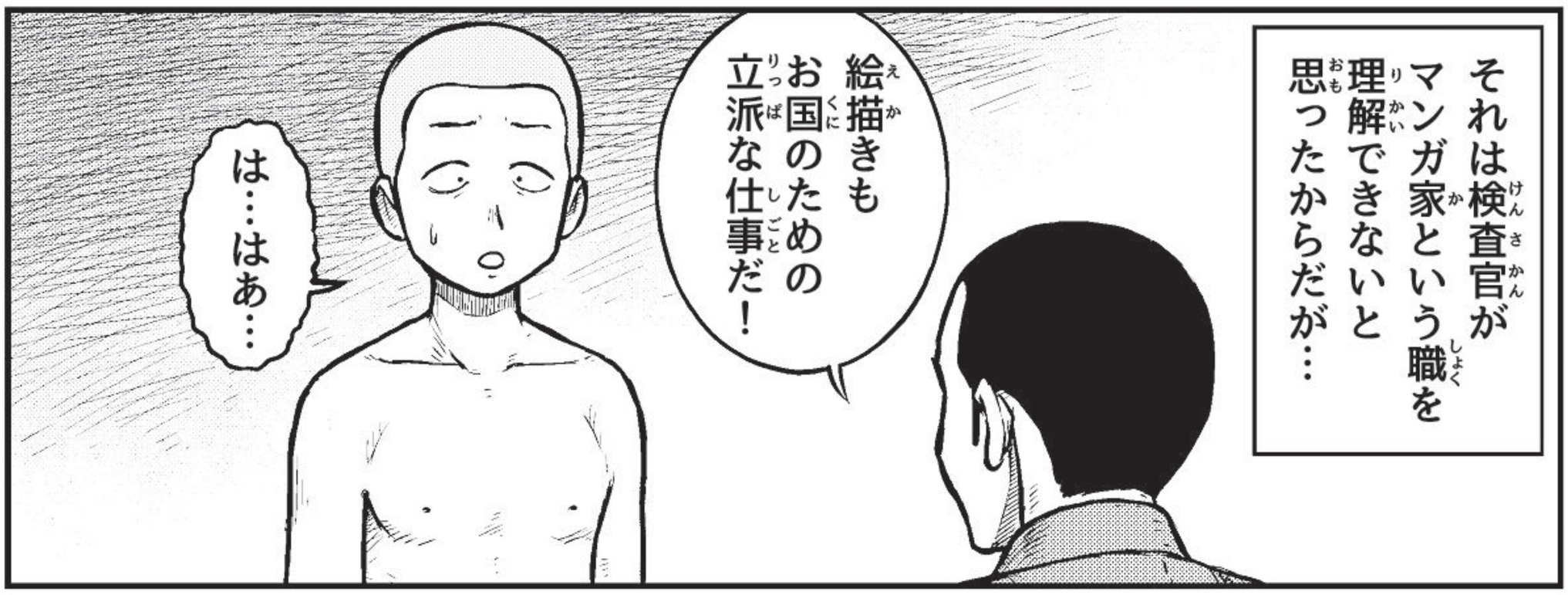
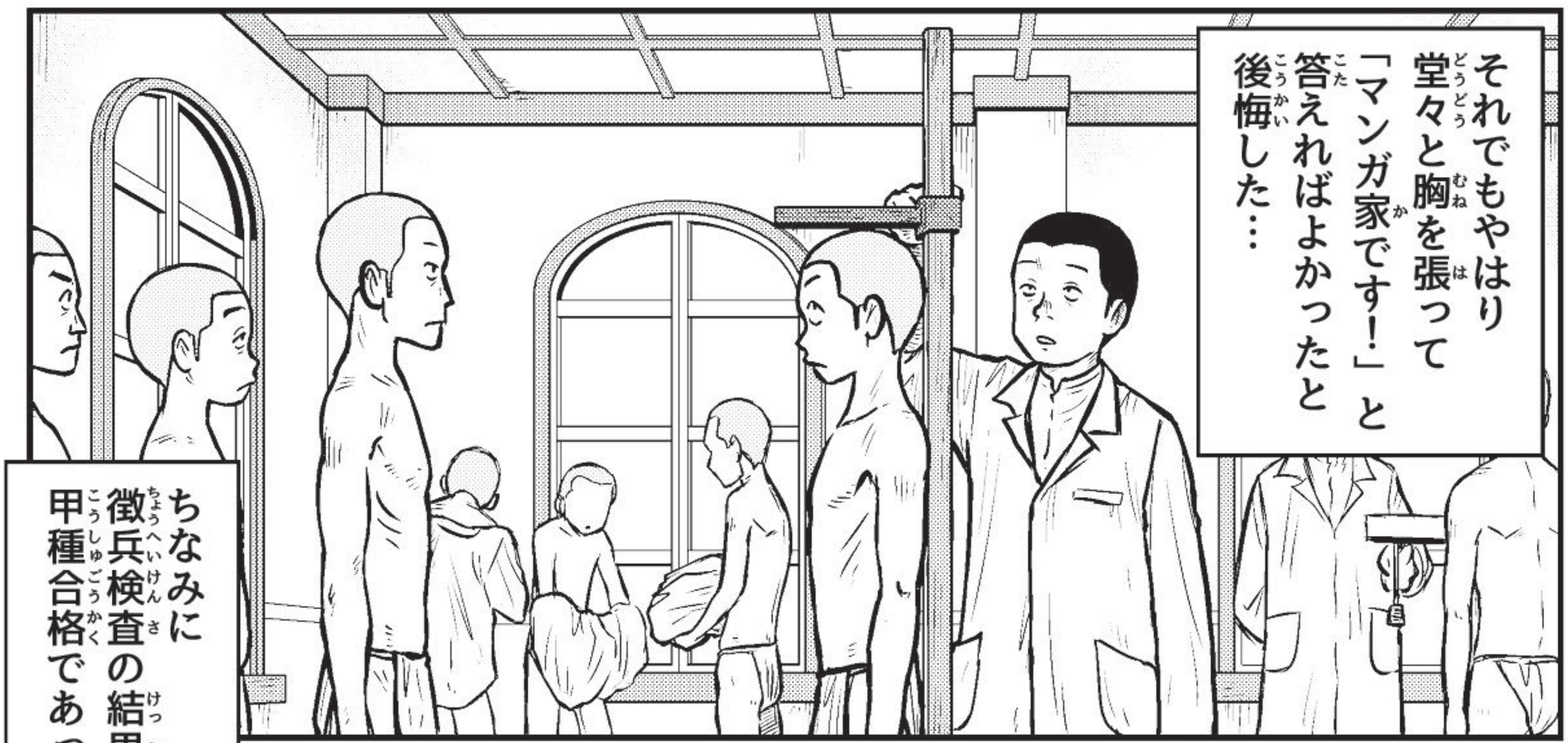
【第3章 軍隊時代①】



昭和9年（1934年）





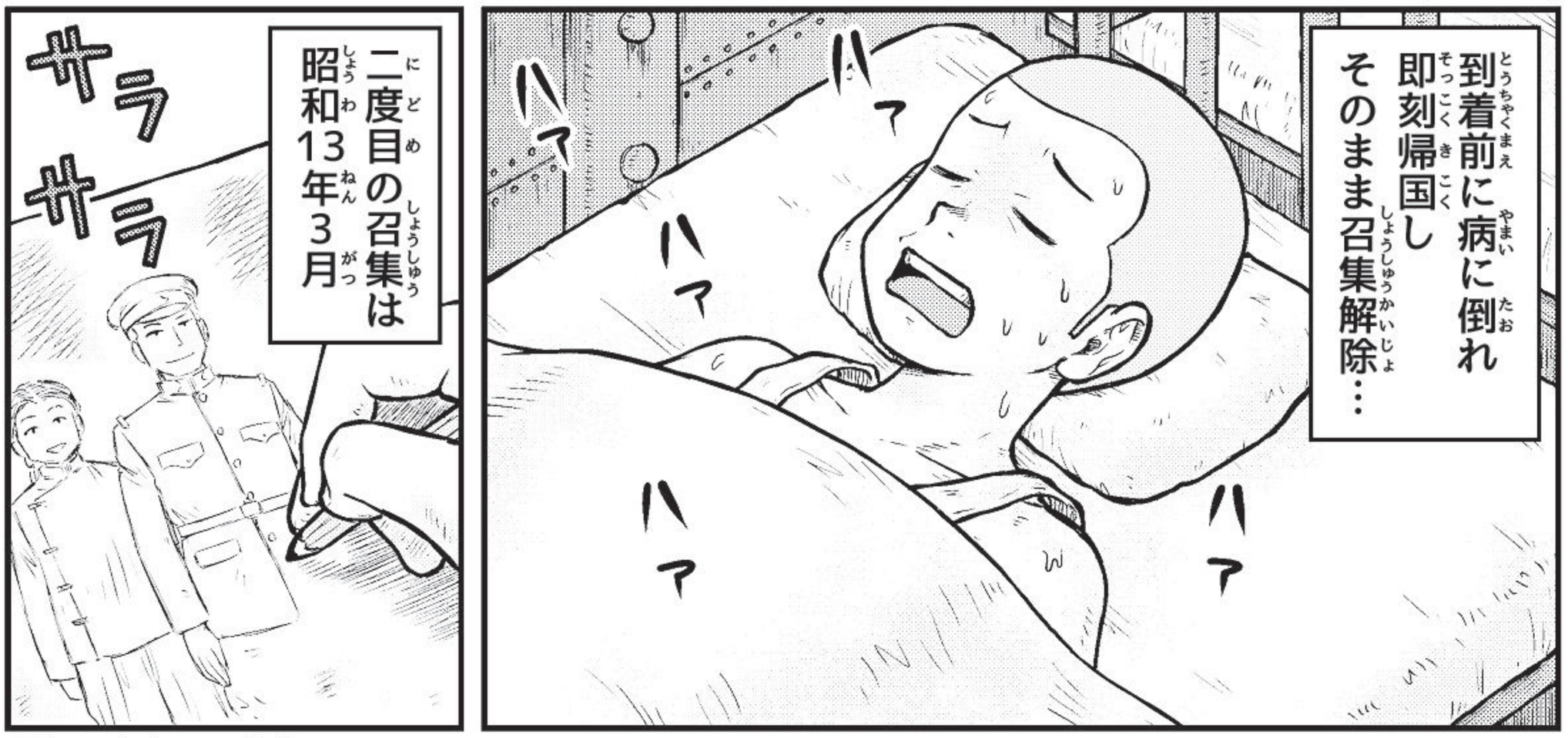


※甲種合格…健康で最も兵役に適していると判定され第一級で合格すること。

最初の召集は昭和12年7月

意気揚々と戦地に向かった良輔だったが

昭和12年(1937年)



昭和13年(1938年)

前線に召集令状が
届くという珍事に
周りの兵隊たちは
大笑いしていた

一度熊本に
帰らずに
ここで軍服に
着替えて
俺たちと一緒に
戦えよ！

ポリポリ

前線とは言え
比較的安全な地域で
取材をしていた
この時の良輔は
戦争を恐ろしいもの
だと感じておらず

むしろ
あちこち行ける
旅行程度に
感じていた…

しかし
その3ヶ月後
それが大きな
間違いだったと
知ることとなる

中国中部地方

良輔の配属された
松浦部隊は
九江から武漢を目指す
「武漢攻略戦」に参加

ザッ
ザッ
ザッ

行軍開始と同時に
降り出した雨は
連日止むことなく

！

※松浦部隊…第106師団。

良輔は
ずぶ濡れの中
ぬかるみを行軍
しなければ
ならなかった

雨と泥で軍服は
鎧のように重く…

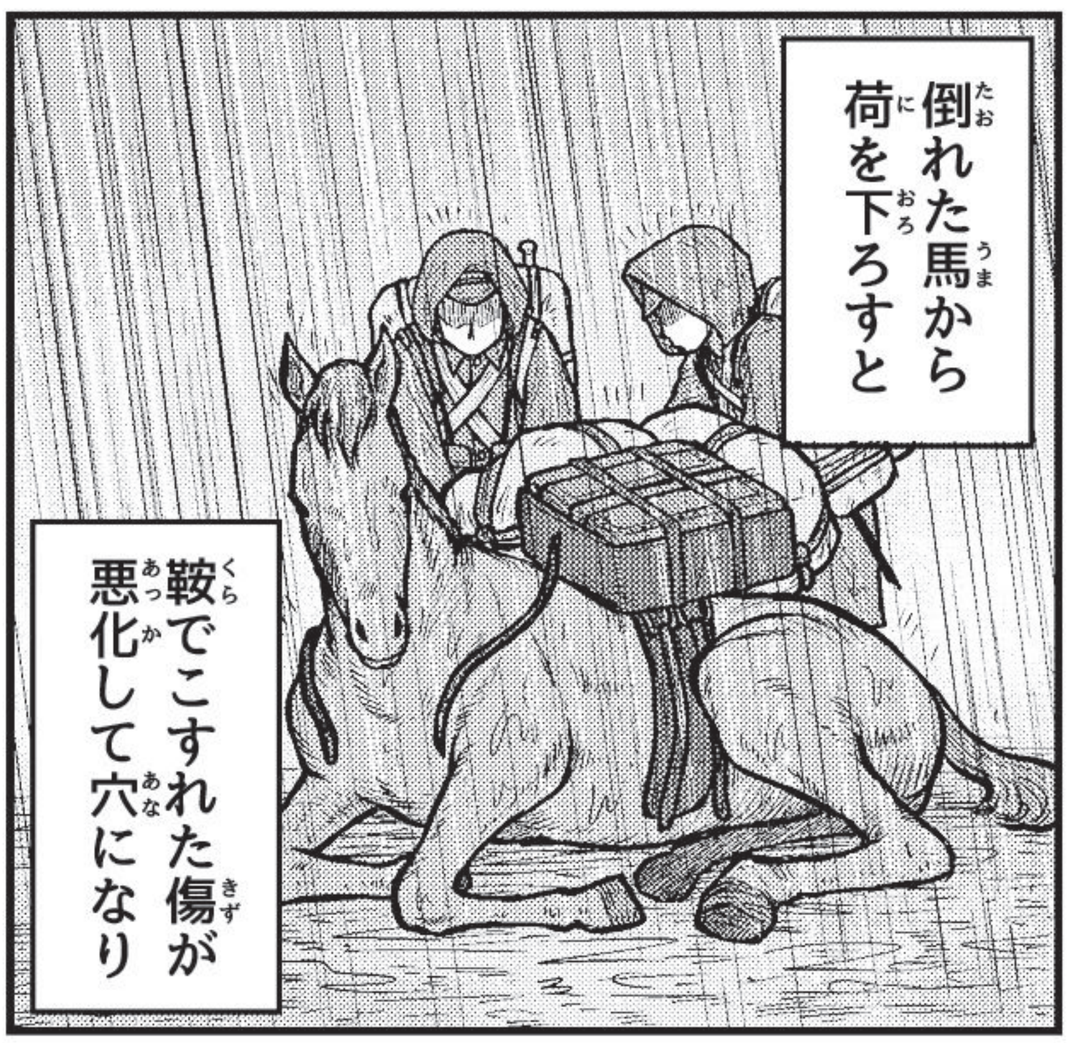
新品の軍靴は
たった一週間で
底が抜けた

ベロン

ありゃ

良輔たち兵隊も大変だったが

重い荷物を背負った馬たちはもっと大変で…



そんな過酷な行軍が連日続いたが

ある日ふと雨が止み

久々に太陽が顔をのぞかせた

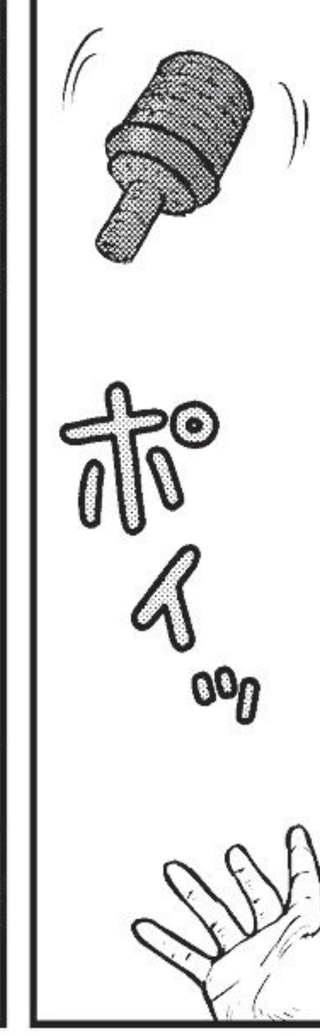
そしてしばらく進むと珍しく水の澄んだ川があり

川だ！

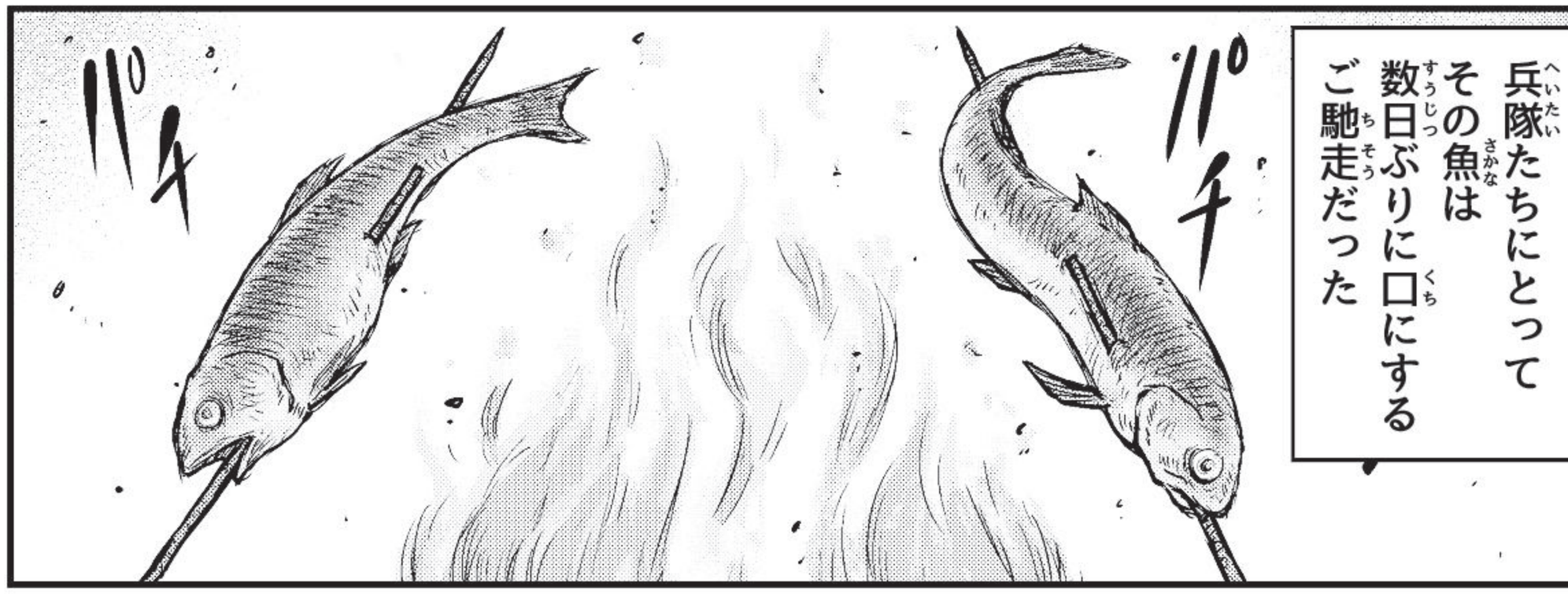
川があるぞお！

兵隊たちは我先に
川に飛び込み
泥だらけの軍服や
体を洗い流し

あっ！
魚！



ついでに
手榴弾で
魚をとった



兵隊たちにとって
その魚は
数日ぶりに口にする
ご馳走だった

ゴクリ
パチ
パチ

あと少しで魚が焼き上がろうとしていた時…
ヒュルルルルル
！

突然周辺に轟音が鳴り響いた
ドオオオン

ああ…俺の魚が…
これは魚を焼いた煙を目がけて敵軍が放った砲撃であった

退避ー！
退避ー！

ドーン ドーン

やっと雨が止んだと思ったら

次は砲弾の雨あられか…

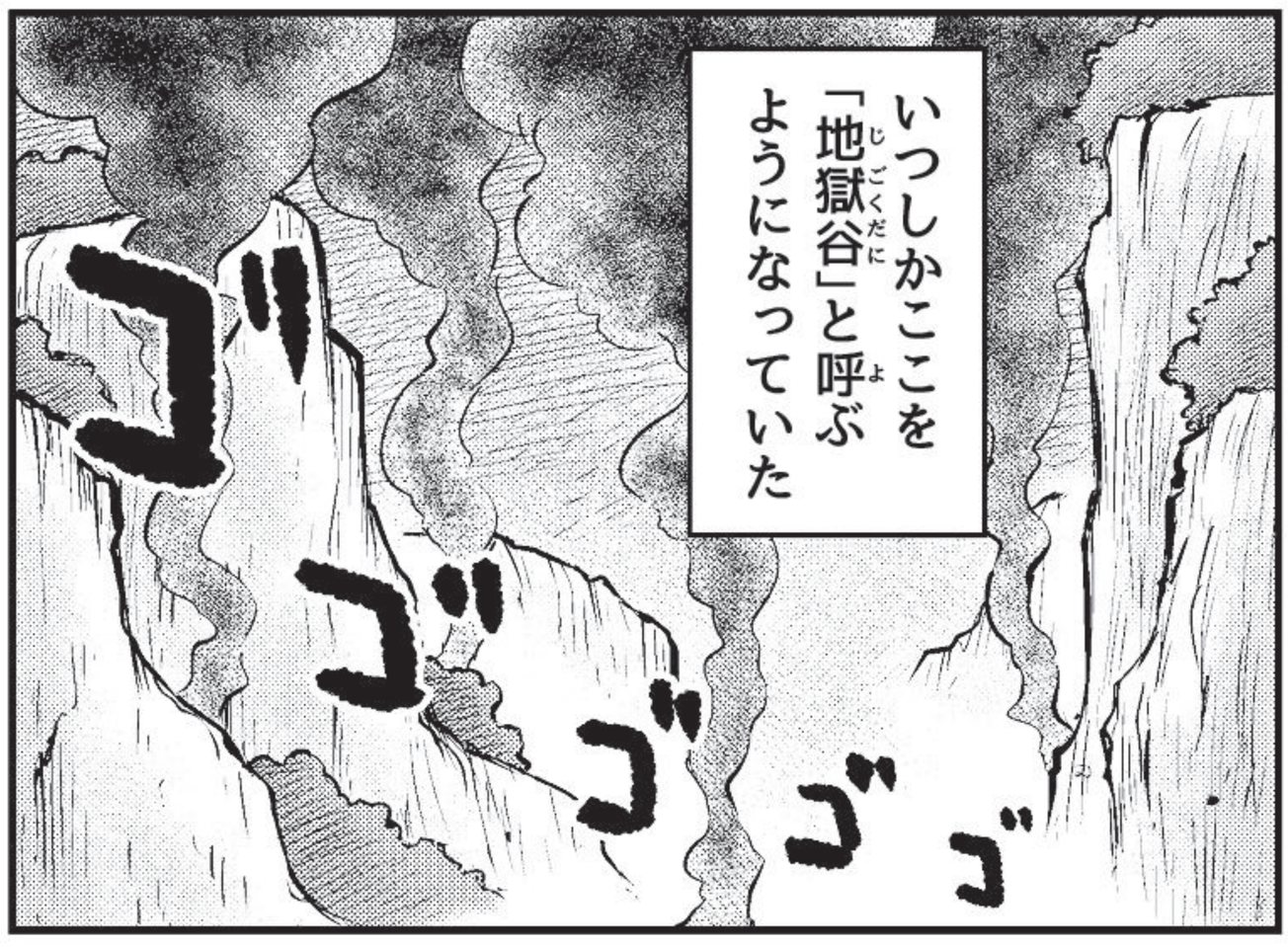
枯れた水路があって助かった…

この時松浦部隊2万人は敵の大軍10万人に包囲されていた

ドン ドン

猛烈な砲撃にさらされること2週間…

敵の攻撃に加え食糧不足と病で良輔の戦友たちはバタバタと倒れ



その日の夜
山の端に
大きな月が登った

良輔は
その月を見ながら
湯前の両親や
まさ乃のことを
思い出し…

涙を流した

うぅぅ…

はあ…

なんで俺は
こがん中国の山奥で
死なんばならんと
やろうか…

そしてその涙は
いつしか悔し涙に
変わっていった

しかし翌日
事態は好転する

あっ
九七式軽爆！

※九七式軽爆…日本陸軍の爆撃機。

友軍機による空爆と
救援部隊の到着で
敵の包囲網は崩れ

ドドド

一人で野戦病院を
目指したが
途中で力尽き
廃墟と化した古寺に
倒れ込んだ…

はあ…

はあ…

せっかく地獄谷ば
生き抜いたとに…

結局こやん
寂しかところで
死ぬとか…

薬も食料もなく
良輔は
ただ死を待つ
しかなかった

しかし

ん？
病人か？

あ…

あ…

幸運にも
道に迷った
山本という軍医が
この古寺を
通りかかった

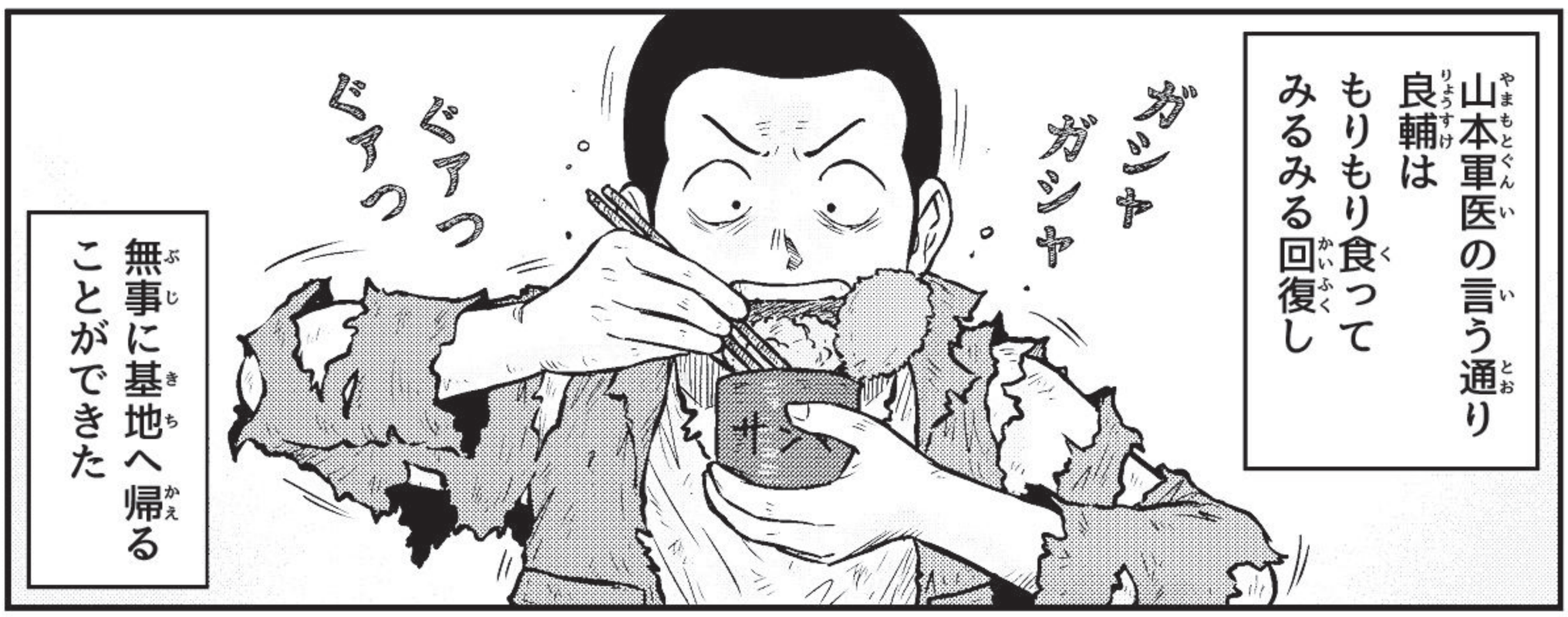
山本軍医は熊本出身で良輔が同郷だと知ると

湯前の焼酎はワシの大好物ばい！

プス

ハァ ハァ ハァ ハァ

献身的に治療をしてくれた上



後日改めてお礼を言うために良輔は山本軍医の部隊を訪ねたが

軍医はすでに戦死していた…

壮絶な地獄谷での戦い…

ドボ

ドボ

戦友たちの死…

そして命の恩人である山本軍医の死が

ドボ

ドボ

のちに良輔が政治マンガに力を注ぐ原動力の一つとなったことは言うまでもない…

資料篇

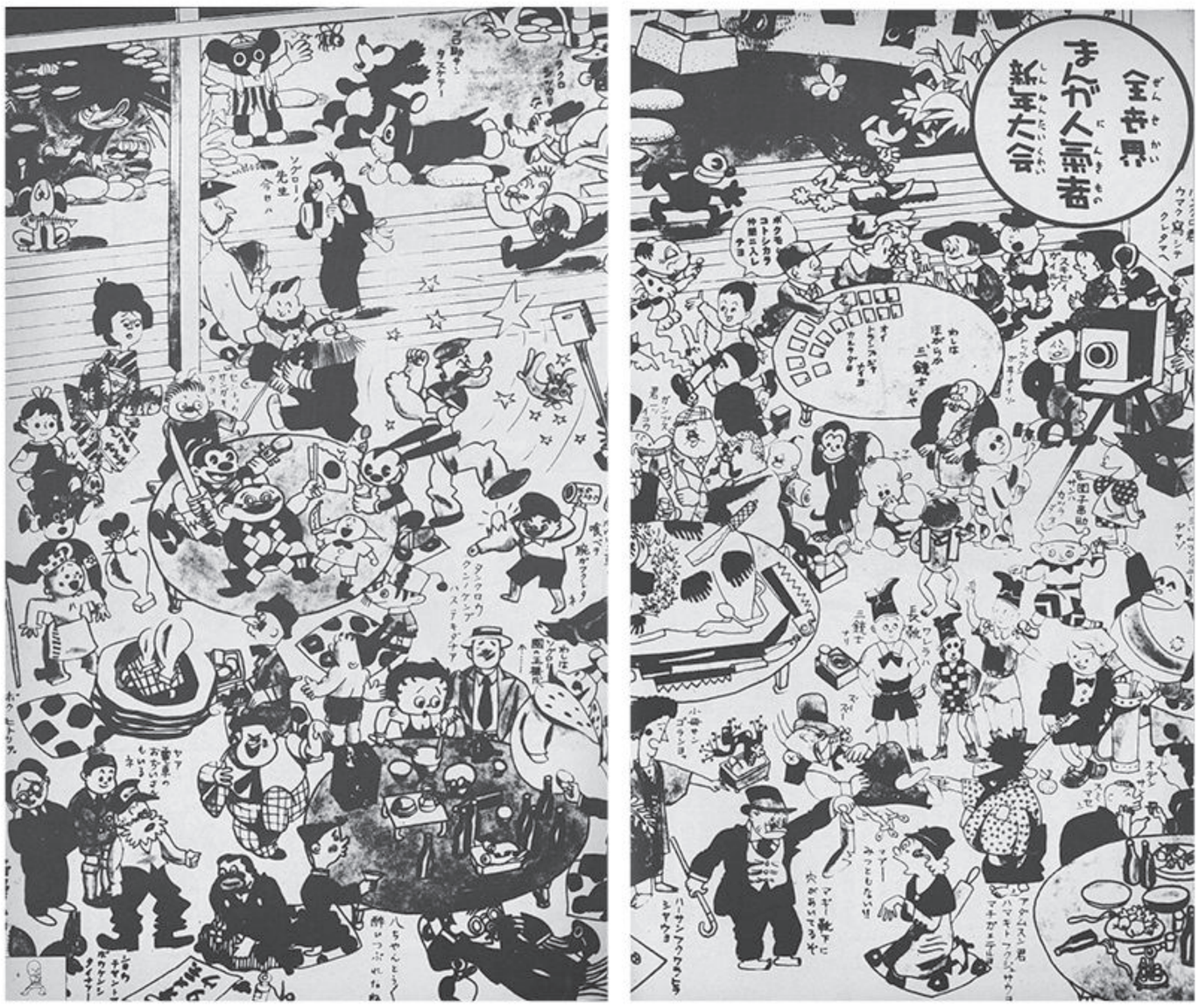
那須新聞

第三号

戦争と風刺

戦前、戦時下のマンガ事情

那須良輔がマンガ家としてデビューする以前のマンガ事情を眺めてみよう。明治大正期に活躍した北澤楽天、岡本一平らはマンガを文化の一つのジャンルとして確立させた。風刺マンガは正統派のジャーナリズムの道具であり、豪華な箱入りマンガが登場する。



全世界 まんが人気者新年大会　新漫画派集団合作「アサヒグラフ」
出典：別冊 1億人の昭和史「昭和マンガ史」毎日新聞社＝昭和52年（1977年）6月

大正末期になるとマンガは柳瀬正夢ら左翼運動家の政治的な宣言のツールとして使われるようになる。昭和初期には一転して小市民的な生活を描いたマンガが登場、下川凹天は哀愁あふれる作品で有名になる。

昭和6年（1931年）には子供の最大のアイドルとなった田河水泡の「のらくろ」が登場、当初はユーモアあふれるお笑いマンガだったが、次第に戦時色を帯びていき、昭和16年（1941年）に当局により突然連載が中止となった。

昭和7年（1932年）にその頃まだ新人だったマンガ家たちが集まって「新漫画派集団」が結成される。彼らはチームを組んで新聞社などを回って仕事を受けて来てそれを分担してこなしていた。これがマンガ制作会社のハシリで、その後のマンガ界の主流を形成していく。

その中心的存在だったのが横山隆一、杉浦幸雄、近藤日出造、横井福次郎らであり、そこに若手の清水崑、そして那須良輔が参加する。

彼ら以前の左翼系マンガ家たちは当局の取り締まりをうけて壊滅、かつての大家たちも時代の変化についていけず新漫画派集団のメンバーは戦時中も当局の依頼を受けて仕事をこなしていく。良輔も当初は従軍絵描きとして戦地に赴き戦争画や軍部を賞賛するマンガを描いたりしていた。

戦後は新漫画派集団は「漫画集団」に名を改め政治マンガ全盛の時代を迎えることになる。